

# 駒場友の会

## 会報第14号

### 南米のマンドリンとギターコンサート

十月二三日(金)、ベネズエラのマンドリン奏者リカルド・サンドバルとフランスのギター奏者マチャ・コレーによる駒場友の会主催の演奏会を開きました。



前回(二〇〇八年十一月一日、九〇〇番教室とは異なり、今年は一二〇席のコミュニケーションプラザ音楽実習室での開催です。臨場感あふれる小さなホールいっぱい、サンドバルとコレーは、「褐色の聖母」「エル・クルサーオ」など十四曲を、南米音楽特有の繊細な音色、鮮烈なリズムで熱演しました。

演奏会のポスター(左は、阿部岳さんにデザイン制作を依頼しました。フランスでのロケハンから衣装選びまで

ネット経由でフォトデイレクションを行い、洗練された作品となっています。当日、駒場の学生達によるベネズエラ音楽合奏団《エストウディアアンティーナ駒場》も出演し、ベネズエラ音楽を二曲演奏。サンドバル&コレーの音楽をいっそう盛り上げました。

### 山田洋次監督講演会

十一月三日(月)特別講演会「山田洋次監督 東大生と語らう」映画に見る日本の食卓が開催されました(キリン・東京大学パートナーシッププログラム)の主催。駒場友の会は共催。



山田洋次監督といえば、「幸せの黄色いハンカチ」や「男はつらいよ」シリーズ、最近はおとうとなどの作品で著名ですが、今回はその映画の世界を「食」という切り口で語っていただく

とても斬新な講演会でした。いくつかの映画の食のシーンを紹介されながら、「俳優は食べる姿に一番人間性が発露する」「食卓の撮影には妥協は許されない。徹底的な考証が欠かせない」とお話しになり、一同、食べることに映画製作の奥の深さに改めて深い感動を覚えました。

### 鈴木秀美さん演奏会



十二月十五日(火)に、鈴木秀美さんと平井千絵さんによる、チェロとフォルテピアノ二重奏の夕べがオルガン委員会との共催で開かれました。

パロックチェロの世界的演奏者として知られる鈴木さんは、二〇〇六年のバッハ無伴奏チェロ組曲以来の駒場の演奏です。平井さんは、鈴木さんとの二重奏で高い評価を得ており、今回

お二人の共演が駒場で実現しました。当日会場には、平井さんが大切にされているピアノが運び込まれました。一七八五年ごろにウィーンで製作されたフォルテピアノの完全な複製です。プログラムは、ベートーベンのピアノとチェロのためのソナタ第一番、「魔笛」の主題による七つの変奏曲、後半は、シューベルトのアルペジオーネソナタ、ベートーベンのピアノとチェロのためのソナタ第二番でした。アンコールには、ベートーベンの「魔笛」の主題による十二の変奏曲の全曲が演奏されました。いずれもチェロの名曲中の名曲ばかりです。

完璧なまでに息の合ったお二人の熱演は、駒場の音楽演奏の歴史に残る名演奏でした。

### 有森裕子さん講演会



一月二七日(水)に、バルセロナとアトラントのオリピックメダリスト有森裕子さんを迎え、「地球と人の未来… 思いつげれば、夢はかなう」と題して、学生との対談形式でお話を伺いました。

NPOなどで幅広く活動されている有森さんは、所属云々ではなく自分の名前で勝負する、何が起きても「せつかく」の機会と考えプラス思考に転換する、難題のある人生は有難い人生などとお話しになり、力強い言葉が印象的でした。参加者から熱心な質問が寄せられ、前向きな生き方に感銘を受けたとの声が多数聞かれました。

駒場友の会は、学生には普段なかなか得られないこのような機会を今後ともさまざまな企画していきます。

## 駒場は心のふるさと

小林善彦

駒場は私の心のふるさとである。教養学部を定年で去るときに数えてみたら、六〇年間のうち半分以上の年月を、駒場の学生か教員として過ごしたのであった。しかしそれだけならば、駒場を定年で去られた先生方のなかにも、同じような方が大勢おられると思う。私の場合、駒場に愛着をもつもうひとつの理由がある。それについて書いておきたい。

昭和十六年の秋、中学の二年生であった私は、それまで生まれ育った日本橋から、井の頭線(当時は帝都線といった)の「池の上」に引越した。そこで毎日の通学に「一高前」を通り、いままも残る一高の正門とその奥の建物の時計台を、電車の窓から見るのが日課となった。一高が私の視野にはじめて入ったのはこのときである。朝に夕に

眺めていけば、一高に入りたくなくなるのは人情で、孟母三遷とはよくいったものである。ただし私の場合はまったくの偶然で、一高の隣の駅近くに引越したのである。

当時日本は四年前から中国で戦争をしており、八五万の軍隊を送り、戦死者もすでに二〇万に達して泥沼化していた。したがって一方では厭戦気分が起こっていたが、同時に英米との関係はすでに開戦直前の危機にあった。ところが私が通っていた東京府立一中では、前の年にわれわれが入学したとき、校長は「本校の教育方針は紳士を育てることであり、英国のイートン校を範としていく」と訓示していた。けれどもその校長は翌年辞めてしまった。辞めさせられたとうわさされている。そんなわけだったから、先生方にも軍国主義に批判的な人がまだかなり残っていた。われわれ生徒のなかには、ごりごりの軍国主義者も結構いたけれども、私の周囲の友人たちにはそれに批判的な人もかなりいた。

英米との戦争がはじまって、やがて日本の敗色が濃くなっていくとき、一高前で降り降りする生徒たちに、ある特徴があるのには気がついた。それは彼らがわざと軍人とさかさな態度、物腰をしているとしか思えないことであつた。そこで同級生のなかに、兄貴が一高生という者がいたので、その人たちの話を聞くと、一高生は圧倒的に反軍国主義らしい。噂によれば、陸軍の将校が一高生に、腰に下げている汚

い手ぬぐいを取れといったとき、安倍能成校長は反論して、手ぬぐいは少しも危険ではなく、邪魔にもならないのに対して、軍人は国内でも重い軍刀をさげているが、誰を切るつもりなのかといったそうである。

この種の情報がつぎつぎに入ってくるにつれて、狂気の日本のなかにあつて、一高だけが学問と自由を守る砦と思えた。毎日見る時計台は一段と気高く見えるようになり、なんとしてもこの学校に入学したいとあこがれるようになった。あとで知ったのだが、昭和二〇年に一高卒の今道友信さんは、駒場の門を入るともう刑事にあとをつけられる心配もなく、自由の空気にほっとしたと書いておられた。

ところで、入りたいとあこがれるのは勝手だが、一高は狭い門であつた。中学四年で受験したときには、一次試験には通つたのだが、二次で落ちた八〇人のなかに入ってしまった。次の年は敗戦直前で試験ができず、内申書だけの選抜でまた失敗。結局あこがれの駒場の門をくぐつたのは、軍国主義日本が崩壊したあとの、昭和二十一年であつた。

いま思えば、生まれてから敗戦までの日本は、知識も判断力もない人たちが支配して、国を滅ぼした時期であつたが、戦後の駒場の寮での三年も、食べるものもろくにない生活であつた。しかしながら、乏しくても自由と希望の時期に駒場で、一生の基礎を作れたのは、まことに幸せだったと、いまま

懐かしく思い出すのである。

(東京大学名誉教授)

## ユードと共に

澁谷智子

若干三五歳に過ぎない私が、ひよんなことから日本手話学会の会長を引き受けることになったのは、二〇〇八年の十二月。会長になっての最初の大会を、昨年十月三十一日と十一月一日に、駒場キャンパスで開かせていただいた。

私は、教養学部比較日本文化論分科から総合文化研究科の比較文学比較文化コースに進み、学部と大学院をあわせると十二年を駒場で過ごしている。手話に関わる研究をするようになったのは、「マイノリティ」としてのろう文化」という卒論を書いてからだ。以来、手話を使う人々のコミュニケーションにすつかり魅せられてしまった。せつせと手話サークルや手話教室に通い、手話を使う人たちの飲み会に行つては情報を集めた。手話は本当におもしろい。

一人の話者が話す場合でも、話の登場人物に合わせてその顔や物腰がくるくる変わる。まるで演劇のようなのだ。実際、手話の語りを撮影したビデオをスローモーションで見ていると、「この顔は、今、子どもを表している」「この瞬間から、その子どもの様子を見たお母さんの表情になっている」「ここから左手がお父さんになった」「今、この空間は子どもの友達」と、話し手の表情や手やまわりの空間が秒単位で

切り替わるのがわかる。

博士論文も、聞こえない親を持つ聞こえる人々(ローダ: Children Of Deaf Adults)の二言語・二文化体験を扱った。日本手話と日本語という二つの言語とそれを取り巻く文化を、子どもはどう吸収していくのか。まわりの人との関わり合いの中で、親が聞こえないことの意味をどのように解釈し、自らの語りを作っていくのか。子育て中のお宅に伺ってメモをとったり、さまざまなコーダの人やデフママにインタビューをしたり、フィールドワークは本当に楽しかった。私自身、博士課程に入ってから二人の子どもを出産していたことがプラスに働いたのか、聞こえない親やコーダたちは、ずいぶん深い話をしてくれた。

さすがに論文はある程度抽象的な書き方にせざるを得なかったが、昨年、一般向けに出版した『コーダの世界』(医学書院)では、そうした親やコーダの人間味あふれる具体的なエピソードを存分に書くことができたと思う。

しかし、海外に比べると、日本は手話を学術的に研究する環境がかなり貧弱である。手話が「言語」というより「ポランティア」というイメージで捉えられてきた歴史のためか、手話の研究も、ろう学校の先生やごく一部の大学教員が、本業を別に持ちながら細々と続けてきた歴史が長い。学会員も自分の本務が忙しくなると学会に来なくなり、若手の人材も育ちにくい。大学を拠点に手話関連の研究が行なわれているア

メリカ、スウェーデン、ドイツ、香港などとは、えらい違いである。創立一四〇年以上の歴史を持つギャロレット大学(Gallaudet University)では、授業のほとんどがアメリカ手話で行なわれ、聞こえる教員も聞こえない教員も、アメリカ手話で研究や教育に携わっている。ギャロレット大学を訪れた時には、本当に驚いたものだ。

日本の手話学会は、学問の体系というよりは個人の集まりで、言語学の人であれば工学の人もあるし、教育学や文化人類学の人もある。手話という研究対象は共有していても、学問的手法はそれぞれかなり違うので、前提とする研究姿勢も違っている。また、学会は、日本手話と日本語の両方を、学会の公用語と会則で定めているのだが、実際には手話のほうが追い付かず、手話を第一言語とする会員たちからは不満がある。

そういう中で開いた駒場の大会では、「分かり合える学会のために」というテーマを掲げ、さまざまな対立軸を超えた会員間の会話を促す環境を作り出すことに努めた。

ろう者の視点を重視した講演やシンポジウムでは、駒場の会場と筑波技術大学、東京都立大学を超高精細画像で双方向に結ぶ手話遠隔通信の実験も実現した。ハイビジョンの二倍という、細部までブレのない映像の美しさは素晴らしかった。

これが私の最後の駒場の思い出になるのだろうか。大会当日、正門脇に



立てた学会開催の看板が青い空によく映えているのを見て、そんな感傷に浸ったのだが、今年の四月から二年間日本学術振興会特別研究員(RPD)として、国際社会科学専攻で研究をさせていただけになった。RPDとは、子育てでブランクのあった若手研究者の再スタートのためのポストドクである。

愛着のある駒場キャンパスで、研究と二人の子育てと学会に追われながら奔走するのは、今からとても楽しみだ。

(教養学部九十八年卒、

埼玉県立大学非常勤講師)

## 駒場キャンパスの樹木雑感

梶 幹男

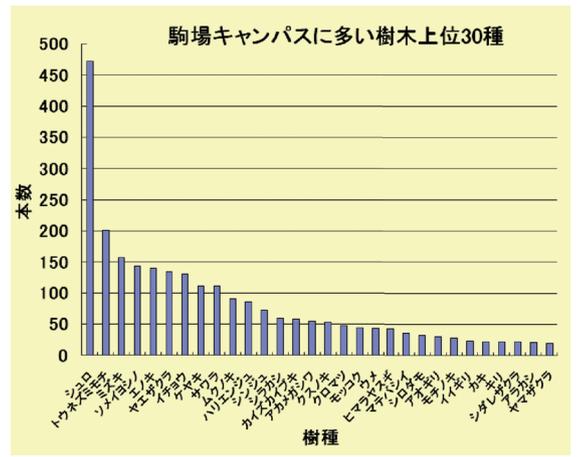
二〇〇五年から駒場キャンパスでのホームカミンググデイ行事の一環として「駒場の樹木をめぐる講演会とイベント」(駒場友の会主催)が開催されています。私は、毎年の講師を務め、キャンパスに生育する樹木の名札つけのお手伝いもさせてもらいました。この五年間に三〇〇本以上の樹木にプレートが付けられたと伺っています。

駒場キャンパスでは、二〇〇三年に構内に生育する樹高一・三m以上の樹木の調査が実施されており、樹種名、樹高、幹周などの測定が行われています。これらのデータに基づいて、駒場キャンパスにはどんな樹種が何本あるのか。また、それらのなかで直径の大きいものはどんな樹種で、何本あるかなどについて紹介します。

駒場キャンパスには、二〇〇三年当時一二一種、二八六九本の樹木が確認されています。これらのうち、本数の多い樹種を三〇位まで示すと次頁の図のようになります。また、一二一種のうち、日本に自生するものは七六種、日本産栽培品種九種で、外国原産のものは三六種、うち中国二二種、北米七種、中近東からヒマラヤ三種、欧州二種、外国産栽培品種二種です。上記の樹種のほとんどは温帯域に生育するものですが、日本に自生するものではカラマツ、トウヒ、チョウセンゴヨウなど寒冷地に生育する針葉樹やハクウンボク、キハダ、ミツデカエデ、チドリノキなど山地性のものも見られます。

キャンパスの樹木で、本数が一〇〇本以上の樹種を多い順にあげると、シユロ、トウネズミモチ、ミズキ、ソメイヨシノ、エノキ、ヤエザクラ、イチヨウ、ケヤキ、サワラの九種で、これらの合計本数は一六〇二本となり、全樹木本数の約五六%を占めています。なかでも二〇〇三年当時、シユロは四七三本と圧倒的な数を占めています。現在、シユロは、新しい建物の増

よってかなりその数が減ったものと思  
います。  
次に、直径三〇cm以上の樹木は全体  
で三九種、三七二本ありますが、その  
うち二〇本以上ある樹種とその本数を  
あげると、イチヨウ(七四本)、ソメイ  
ヨシノ(五六本)、ケヤキ(四七本)、ク  
スノキ(三三本)、エノキ(二四本)、ム  
クノキ(二三本)の六種で合計二五七本  
となります。この本数は直径三〇cm以  
上の樹木全体の六九%を占めており、  
これら六種が駒場キャンパス全体の樹  
木を特徴づける樹種群といっても過言  
ではないでしょう。さらに、少しサイ  
ズを上げて、直径五〇cm以上の樹種数  
と本数は、全体で十二種、三一本あり  
ます。それらを本数の多い順に示すと、  
クスノキ(七本)、イチヨウ、ヒマラヤ  
スギ、ムクノキ(各四本)、ケヤキ(三



駒場博物館裏のクスノキ。  
キャンパスで一番直径の大きい樹木となっている。

本)、ユリノキ、モミジバフウ(各二本)、  
トウネズミモチ、カツラ、メタセコイ  
ア、エノキ、クロマツ(各一本)となり  
ます。また、上記の三一本中、直径の  
大きいものは、駒場博物館裏の北東角  
にあるクスノキ(左写真)が七〇・五  
cmで第一位、第二位は二郎池の東側  
斜面にあるケヤキの七〇・一cm、第三  
位は八号館前のイチヨウ並木のうちの  
一本とラグビー部室近くにあるユリノ  
キのいずれも六八・五cmです。  
話は変わりますが、樹木の多くは人  
間よりもずっと長寿で、またそのサイ  
ズも大きいが故に、われわれはその姿  
にときに畏敬の念を抱き、ときに時代  
の流れをその樹木の成長と重ね合わせ  
て懐古することもできます。  
私の勤務する北海道演習林は、道央  
富良野市にあります。総長は、任期中  
にこの演習林を訪問することが慣例に  
なっています。その際、樹木園の一角  
で記念植樹が行われます。教養学部の  
初代学部長を務められた矢内原忠雄先

**新入生歓迎講演会のお知らせ**  
「科学と技術のあいだ…トランジス  
タから超LSIまで」  
四月十四日(水)午後六時から  
同封のチラシをご覧ください。在校生  
はもとより、駒場友の会の会員・会  
友の皆さまのご参加を歓迎します。

生も総長時代の一九五三年に当園を訪  
問、記念植樹をされています。植えら  
れた樹種は北海道演習林を代表する針  
葉樹の一種、マツ科モミ属のトドマツ  
です。現在その直径は四五・七cm、樹  
高は二二・九mに達していることをこ  
の場をおかりしてお知らせします。  
キャンパスに生育する樹木がこれか  
らもここに集う学生・教職員の皆さん  
に、四季折々の憩いと安らぎを与え、  
名前を知られることで一層親しまれ、  
愛されることを願いつつ筆を擱きます。  
(東京大学農学生命科学研究科教授、  
北海道演習林長)

毎年秋のホームカミングデイには、  
梶幹男先生に、樹木に関する講演をお  
願いしてきました。今年も、十一月  
一日(土)に、「東京大学北海道演習  
林が目指す理想の森づくり」というタ  
イトルで講演をしていただきました。  
構内の豊かな自然は、水や植生、動  
物を含めて、駒場の貴重な財産です。  
駒場友の会は、この誇るべき財産に  
皆が親しみを深めていく事業をこれか  
らも推進していきます。

駒場友の会会報 第14号  
2010年3月10日発行  
駒場友の会  
〒153-8902  
目黒区駒場3-8-1 東京大学  
駒場ファカルティハウス内  
電話 03-3467-3536  
FAX 03-3465-3334  
郵便振替口座  
00170-3-481649  
メール  
info-tomo@adm.c.u-tokyo.ac.jp  
ホームページ  
http://www.c.u-tokyo.ac.jp/  
ilovekomaba/  
デザイン・印刷 株式会社双文社印刷  
http://www.sobun-printing.co.jp

穏やかな日差しの中でゆったりと  
くつろぐことのできる

フランス料理  
**ルヴェ ソン ヴェール 駒場**

駒場友の会の皆様がお食事の際に注文なされた  
コーヒーは、お支払いの際に会員証・会友証を  
ご提示下さいますと無料になります。

営業時間 11:00 ~ 14:30, 17:00 ~ 21:00  
Tel: 03-5790-5931 / Fax: 03-5790-1902  
駒場ファカルティハウス内

**会費納入のお願い**  
二〇一〇年度の年会費をまだお納  
めいただいていない方が若干名い  
らっしゃいます。年会費は、会員  
は四千元、会友は二千元です。ど  
うぞよろしくお手続き下さい。  
詳しくは、駒場友の会事務局まで。  
〇三―三四六七―三五三六